Akita University

西洋弁論・修辞学概史（Ⅲ）

奥山　藤志美

その後のヨーロッパ大陸の弁論・修辞学の歴史

中世以降のヨーロッパ大陸の修辞学の歴史に関して、ここで少しばかり触れておく必要があろう。この場合にイギリスの弁論・修辞学の発展に影響のあった４人から５人に絞り込むことにする。

最も大きな影響を及ぼしたのがエラスムス Erasmus である。この著名な学者はイギリスに５年ばかり滞在した。その関係でグラマー･スクール Grammar School のカリキュラムや弁論・修辞学の訓練のやり方に一つの刻を印したといっていいだろう。彼はたまたま偶然にもコレット司祭 Dean Colet がセント･ポール寺院に附属の学校を創設していたときに当地に来ており、コレットの求めに応じて何冊かの教則本を準備した。この中に *De Ratione Studii* と *De Duplici Copia Verborum ac Rerum* というのがある。元々はこの著書は１５１２年に初版を出したのだが、その後大変な人気を呼び、驚くべき数の版を重ねている。（例えは後者は少なくとも１５０刷もでており、その中でもいくつかはイギリスでも出版されているのだ）前者は弁論･修辞学というより教育学を扱っている。しかし弁論･修辞学を学ぶものにとっては時々言葉の術について見逃すことの出来ない言及がちりばめられているので興味を引くのだ。彼が強調しているのは、＜精読をやること＞と＜演習を続けること＞は必要だといっていること。また、彼は＜書くこと＞についての健全な教則本の提唱者として先見の明を示した人たちの仲間に数えられる。ともかく「書くことだ！書くことだ！」を繰り返し強調している。彼は又日常語を書き留めておくことや、韻文を散文に、又逆に散文を韻文に言い換えたり、一つの主題を二つ以上の文体で書き表すこと、並びに一つの命題をいくつかの議論の方法で証明したり、又ラテン語の文章をギリシャ語の文章に翻訳する作業を大いに薦めた。

De Copia という本、これはチュウダー朝 Tudor Age 時代の学校で大変普及した本だが、この本はラテン語の作文で、その表現の上品さとか多様性を生徒が会得する教則本であった。このテキストは、res - verba、即ち＜物＞と＜言葉＞、更には matter と form を識別する方法に基づいている。*De Copia* の最初の本は学生に作文を多彩なものにするために schemes や tropes(elocutio の部分)を如何に用いるかを伝授している。この第二巻目の本は topics(inventio の部分)を用いて、上と同様の文章の多彩さを身につけさせようとした本である。

Copia という概念はチュダー朝の教育にとって大きな関心の一つであった。ラテン語の copia という語は英語では plenty とか abundance に相当する。もう少しこの場合の特別な意

Akita University

味を付与すると、ラテン語では copia dicendi とか copia orationis という語句で表されるが、これは＜豊かな表現＞とでも言う日本語訳に相当するが、英語では fullness of expression に相当するだろう。この＜豊かな表現＞を獲得するには一つの主題を言い表すのに沢山の言葉を積み重ねるか、それとも同じ物を様々な表現で言い換える力のことを指す語句である。かくして copia は弁論・修辞学の言葉で言えば、豊かな invention であるが、日本語でいえば〈斬新な切り口とか、発想〉とでもいえようか、または〈文体上の多様さ〉（resourcefulness）にあたるだろうか。Copia という概念を具体的に示す方法としてエラスムスは第一巻の３３章で Tuae literae me magnopere delectarunt を１５０種類に言い換えているし、又 Semper dum vivam tui meminero を２００通りに言い換えている。

その他のエラスムスの修辞学に関する本は彼の手紙の書き方の教則本、即ち *Modus Conscribendi Epistolas* で、１５２２年に出版されている。前にも述べたごとく書簡の書き方の手引きは中世時代の弁論・修辞学を勉強する格好の分野の一つであった。しかしレネッサンス時代になると、この分野は一段と格が下がってしまった。しかし全然無視された分野でもなかった。エラスムスにとっては手紙こそが弁論・修辞学の初歩をマスターした後にまず最初に取り組まなければならない課題作文であった。現代のような高速通信・運搬の手段のなかった往時は外交上の物であれ、これらは全て書簡の形をとってやりとりされていた。従って手紙の上手な人物が演説のうまい人と同様に引っ張りだこだったのだ。それで書簡作成の手引き書が、これは当時の共通語のラテン語であれ、各国の言葉であれ、１６世紀や１７世紀では大変な需要を生んでいることでもわかるというものだ。今日においてさえ手紙の書き方の正式な様式の訓練は無視できないものがある。友人間の私信であれ、業務上の手紙であれ、又販売宣伝のための手紙であれ、又編集者への手紙であれ、これらは学校を出ると必ず直面する文章の重要な型である。

エラスムスと並んでジュアン・ルイス・ヴィヴィウス Juan Luis Vives (1492-1540) はイギリスに滞在したのはほんの数年であるが、ほぼ一世紀に及ぶほどイギリスのグラマー・スクールに影響を与えた。生まれはスペインで（それ故彼と同国生まれのローマの弁論・修辞学者クインテリアンにちなんで‘第二のクインテリアン’と噂された男）、教育はパリとフランドルで受けたが、彼はイギリスにやってくるやウルジー枢機卿 Cardinal Wolsey によってオックスフォードの弁論・修辞学の講師に１５２３年に任命された。時の国王ヘンリー八世は自分の娘メアリーの教育係を彼ヴィヴィウスとトーマス・リナクル Thomas Linacre に託したほどである。ところがヘンリー八世がアラゴンのキャサリン Catherine of Aragon との離婚を策している間にキャサリンと同国人であったヴィヴィウスはいわば persona non grata（時の人でなくなり）となり１５２８年英国を去り二度と戻らなかった。

ヴィヴィウスのイギリスの弁論・修辞学への影響は教科書と言うよりは彼の教育法の著書に負うところが多い。この仕事によってイギリスの弁論・修辞学のカリキュラムの型を定めるのに預かって力があった。エラスムスと違ってヴィヴィウスはイギリス滞在中に弁論・修辞学に関する著書をものしなかった。それで後に彼が書いた弁論・修辞学の教則本はイギリスの学校では広く採用されなかった。彼がイギリスを去ってから三年後の１５３１

Akita University

年、アントワープで *De Disciplinis* という教育に関する大著を出版した。その後弁論・修辞学に関する本が三冊もこれに続いてものされる。即ち *Rhetoricae, sire De Retione Dicendi, Libri Tres*(これは Louvain で１５３３年刊行)、*De Consultantione* (Lourvain, 1533)がそれだ。それから彼がオックスフォードで教えていた時に作った講義要録であり、次に *De Conscribendis Epistolas*(Basel, 1536)が書かれるが、最後の物は書簡文の修辞学に大きな貢献をなしている。

De Ratione Dicendi とその姉妹本である *De Consultatione* はベン・ジョンソン Ben Jonson が *Timber and Discoveries* という修辞ばった本の種本にしている。シェクスピアも又彼のグラマー・スクールに通っていた頃は，これらの作品に触れた可能性は大いにある。しかも当時のグラマー・スクールの規則の示すところによると、エラスムスの教則本はカリキュラムとしてしばしば推薦されていたが、ヴィヴィウス Vives の教則本については滅多に触れられていない。チュダー朝時代のグラマー・スクールに関しての記念碑的著作である『ウエリアム・シェークスピアのわずかなラテン語の知識とそれよりも劣るギリシャ語の知識』*William Shakespeare' s Small Latin& Less Greek* の著者ボールドウィン教授 T. W. Baldwin は，その間の事情を「エラスムスは本当の意味でルネッサンスの第一人者であるのにヴィヴィス Vives やコレット Colet はルネッサンスよりもカトリック側の改革、即ち反宗教改革 Counter- Reformation に与しているからだろう」と述べている。ヴェヴィスやコレットは文学的洗練よりも道徳的改革により興味を持っていたようだ。

彼らの他に三人のヨーロッパ大陸の弁論・修辞学者、しかもイギリスの斯界に影響を与えた者達についてもここでちょっと触れてみる価値がありそうだ。まずペトルス・モゼレヌス Petres Mosellenus だが、彼の俗姓ではペエール・シェード Pierre Schade(1493-1524)といい、ライプチッヒ大学 Leipzig のギリシャ語の教授であった。彼は *Tabulae de Schematibus et Tropis Petri Mosellani* と題するテクストを公にしている。１５２０年というチューダー朝も早い頃は，イートン校 Eton School の生徒達はこのモゼラヌスの第六版を用いていた。これを見ても１６世紀の前半においては Mosellanus のものがイギリスのグラマー・スクールのエロキュシオ elocutio の標準的なテキストになっていた。

フィリパス・メランヒトン Philippus Melanchton または Philip Schwaitzerd(1497-15607)はヴィテンベルグ Wittenberg 大学の古典学の教授で、マルチン・ルター Martin Luther と親しい関係にあったが、彼は三冊の修辞学のテキストを刊行している：*De Rhetorica Libri Tres* (Wittenberg, 1519), *Institutiones Rhetoricae* (Hagenow, 1521), *Elementorum Rhetorices Libri Duo* (1531) がそれだ。モゼラヌスは集中的に文体 style を扱ったが、メランヒトンは構成 schemes とか比喩的表現 tropes を最小限に扱い、もしそのことについてもっと知りたければキケロやクインテリアンやエラスムスそしてモゼラヌスを読むことを薦めている。彼は専ら＜発想・構想＞inventio と＜配列・組織＞dispositio を集中的に扱っている。メランヒトンは＜発想・構想＞と＜配列・組織＞を論理学の領域に帰属させている。そうすることにより、彼は後の１６世紀になって興ることになるラメス Ramus やタラエウス Talaeus の大変革の下地を造ることになったのだ。

Akita University

ヨアネス・スセンブロタス Joannes Susenbrotus の *Epitome Troporum ac Schematum*(Zurich, 1540)はモゼラヌスとメランヒトンのものを合体させたものである。「配列」schemes と「比喩的表現」tropes を１３２も集めてある『修辞学大要』*Epitome* は、１５６２年にイギリスで出版されており、それ以降１６世紀を通してこの本は先のモゼラヌスの本に取って代わりイギリスのグラマー・スクールの標準的なテキストとなり、その後のイギリスの弁論・修辞学の技法のモデルの役割を果たした。

１６世紀のイギリス在来の弁論・修辞学

この概論の中で触れてきた全ての弁論・修辞学はギリシャ語かラテン語で書かれて　きた。そして１６世紀の初頭２０年までに書かれたイギリス人による大抵の文章はラテン語で書かれていたのは周知の事実である。イタリアに興ったルネッサンスがフランスに広まり、ついてイギリスまで到達し、ロジャー・アシャム Roger Asham, サー・ジョン・チーク Sir John Cheke, サー・トーマス・エリオット Sir Thomas Elyot のような人文主義の徒を通して古代古典の著作者達の文物に対する興味が復活したのだ。１５０３年、アルダス Aldus がギリシャの主な弁論・修辞学の著書を出版したとき、古典古代の弁論・修辞学は確実に彼らイギリス人の知識層の関心事になった。先に見たごとく、この国においての弁論・修辞学の正当な方向付けはエラスムスやヴィヴィスがイギリスのグラマー・スクールのカリキュラムの基礎を造ったことによって決定的なものとなった。かくしてチューダー朝のグラマー・スクールや大学の中で修辞学が主要な学科になるのに暇はかからなかったのである。

学校で教えられた弁論・修辞学は基本的にはアリストテレス学派のものであったが、アリストテレス自身の書いた『弁論・修辞学』が主要なテクストではなかった。イギリスのこの頃の学校教育を支配していたのは、ラテン語の弁論・修辞学者、特にキケロ、クインテリアンそして名前は知られていないが *Ad Herennium* の著者であった。イギリスがその国としての地位や業績が高まるにつれて、当然自分たちの言葉に対する誇りも高まり、教師達も母国語でテキストを造り、生徒達に使われるようになるのは当然の帰結であった。

普通イギリス・ルネッサンス時代に母国語で書かれた弁論・修辞学のテキストを三つの主なグループに分類することが行われている。:（１）伝統派—弁論・修辞学の五つの部分即ち＜発想＞、＜配列＞、＜文体＞、＜記憶＞、＜発話＞を全部扱う人たち。（２）ラメ派 Ramists ; 彼らは＜発想＞と＜配列＞の部分を論理学の領域に任せ、＜文体＞と＜発話＞の部分を弁論・修辞学で扱う人たちである。(３)比喩主義者 figurists; 彼らの主たる関心は、むろんこれだけではないが、様々な比喩的表現（直喩 smile、隠喩 metaphor 等）に集中している。実際はこの三つの派の違いは、弁論・修辞学の根本理念よりも彼らの教授方法にあるといわれている。例えばラメ派と伝統派は同等に＜発想＞と＜配列＞に重点を置いたというが、前者はこれら二つの科目を論理学の範疇でやるのが望ましいと考えていた。ラメ派は比喩派ほど多くの比喩的表現を考えていなかったかも知れないが、しかし比喩派が＜文体＞のもとで研究していた多くの比喩的表現をラメ派は＜発想＞invention の中のトピッ

Akita University

クスと関連づけて考察していた。続々と発刊された英語で書かれたテクストを概観すると我々読者はこれらの本が三つのグループのどれに属するかを判断する能力を要求されるのである。

レオナード・コックス Leonard Cox。彼はレデング Reading のグラマー・スクールの校長であったがイギリスで最初に母国語で弁論・修辞学の教科書：『弁論・修辞学の術』（ *Arte or Craft of Rhetoryke* ,1530）を編んだ栄誉に浴している。この最初の英語で書かれた修辞学のテキストは当然伝統主義者のそれであったというのは恐らく適切なことである。カーペンターF. I. Carpenter は、このコックスのテキストの現代版で、このテクストはメランヒトンの *Institutiones Rhetoricae* の第一巻に基づいていること、部分的にはそれから翻訳もされているということを誠に的確に証明している。メランヒトンと同様にコックスも主な興味の対象は＜発想・構想＞の部即ち inventio であった。

１５５０年、リチャード・シェリーRichard Sherry。彼はマグダレン・コレッジ Magdalen College School の校長であったが、デーの出版社 J. Day' s press から『修辞的詞姿に関する論考』*A Treatise of Schemes and Tropes* を発刊する。この冊子は時には英語で書かれた第二番目の弁論・修辞学の本と呼ばれてきた。この冊子は確かに英語で書かれた修辞的詞姿（比喩的表現等、言葉の綾）に関する最初の冊子であると正当に主張することが出来るだろう。それから五年後、彼は先のテキストのラテン語と英語を併記した版を出し、表題を『文法と修辞学の詞姿に関する論考』と変更する。彼がこのテキストを出版した動機はグラマー・スクールの市場をねらったものであったようだ。しかし、彼のもくろみは失敗に帰する。何故なら当時モゼラヌス Mosellanus とスーゼンブロツス Susenbrotus のテキストがグラマー・スクールのカリキュラムの中にすっかり根を下ろしていたからだ。それで彼の冊子は一冊しか出ていない。

英語で書かれた弁論・修辞学の編者達は元のラテン語のテキストとの競争では敗北感を味あうが、それにもめげず出版し続ける。そしてはじめは学校現場においてラテン語のテキストに取って代わることはかなわなかったが、ついには販売の面においては前者を凌駕するようなる。名声の面ではかなわなかったが。

広く流布した母国語で書かれた修辞学のテキストの嚆矢はトーマス・ウィルソン Thomas Wilson の『弁論・修辞の術』*The Arte of Rhetorique* (1553)であった。この本の粋な現代版を出版したメア G. H. Mair はウイルソンについてこう述べている。「著者はケンブリッジ大学関係者の一人で、ルネッサンス時代のイギリスで教育の面で一つの筋道を付けるのに大いに貢献したし、イギリスの散文の発達に少なからぬ影響を及ぼした人である」と。　この本は弁論・修辞学の五つの部分を扱っている点においてキケロ派に属していると言えるが、このテキストに関しての研究者の第一人者であるワーグナーRussel H. Wagner はウィルソンはエラスムス、コックス Cox やシェリーSherry からのものを付け加えて彼の修辞学の教義のいくつかを構成し直したのだろうと指摘している。

上述のウイルソンの修辞学は古典古代と中世の弁論・修辞学の粋を入念に再構成し概要化したものである。この本の第一巻は弁論・修辞学の５つの要素（"Invention, Disposition,

Akita University

Elocution,Memorie, Utteraunce"); 演説の７つの部分("Enterance, Narration,Proposition,Division, Confirmation, Confutation,Conclusion"); ３つの種類の演説(" Demonstrative,Deliberative,Judicial");そしてこれとの関連で＜発想･構想＞Invention の問題を取り扱っている。第二巻は＜配列＞Disposition 並びに＜敷衍の詞姿＞Figures of Amplification を扱っている。第三巻は主に Elocution(style)と Memory と Delivery の概要的説明に当てている。この本の主たる魅力は著者が古典･古代の弁論・修辞学の膨大な量の、しかも的確な資料を収集し、それを彼独自の考察と例証をもって構成し直し、しかも魅力的な英語の散文で綴ったことだろう。当時の同国人にとってウィルソンが" strange inkhorn terms"（衒学的なきざな言葉）と呼んでいるものに批評を加えていることにある種の魅力を感じたのだろうと思う。

これ以降多くの弁論・修辞学のテキストが出るが、その最も人気のあったのが必ずしも最も健全だったわけでもなく、又最も大胆だったわけでもない。これから順次イギリスにおいての（その後アメリカの学校においての）弁論・修辞学の伝統の活力と多様性を示すために代表的なテキストを１８世紀の終わりまでたどってみよう。

中世に起源を持ち、エラスムスやヴィヴィスの人口に膾炙した冊子で引き継がれた書簡を作成することに関する修辞学は、１６世紀の後半に入るとエンジェル・デーAngel Day が『イギリスの秘書』*The English Secretorie* (1586)を世に出すことで新たな弾みがつくことになる。彼は四つの項目のもとに３０種類の異なった書簡を分析して見せる。この四つの項目とは論証的なもの demonstrative, 審議的なもの deliberative,司法に関わるもの judicial,そして日常一般に関わるもの familiar である。この本の第二版で彼は詞姿 figures of speech に関する一章を付け加える。そして具体的な手紙の形で様々な比喩の例を挙げこの本に一段と輝きを与えている。

ジョージ・パアテナム George Puttenham の『イギリス詩歌の術』*The Arte of English Poesie* (1589)は、英文学の徒にとっては詩歌の擁護または弁護を試みた一連のエリザベス朝時代の論文の一つとして見なされているが、しかしこの冊子は弁論・修辞学の理論に対してもある種の貢献をしている。この本の第三巻は詞姿を詳細に論じているのだが、これはスーゼンブロタス Susenbrotus, モゼラヌス Mosellanus, エラスムス Erasmus そしてシェリーSherry の伝統に則っている。彼パアテナムはイギリスの弁論・修辞学に二つの貢献をしている。まずギリシャ語やラテン語の詞姿名に英語の名称を当てたこと；それからこれらの詞姿の分類に理論的基礎を与えたこと、そしてそれらを詞姿の特質に従って分類したことである。よって' auricular' なる術語を造った。これは「音声、アクセント、時制」の変化に基づいた効果に依存した詞姿に付けられた名称であり、専ら耳に訴えるものである。次に' sensable' という術語も造った。これは意味を変える詞姿であり、従って専ら精神に訴えるものである。さらに' sententious' という術語も造った。これは精神と耳とに訴える詞姿のことである。概して彼は１０７の詞姿を扱っている。１９世紀の英文学者ジョージ･センツベリ George Saintbury がこの本に言及して、「当時のイギリス文学において見いだしうる

Akita University

最も精密な詞姿論である」といったとき、この言及が全く当たっているかというと必ずしもそうではない。何故ならヘンリー・ピーチャム Henry Peacham が１５７７年に出した『雄弁の園』*The Garden of Eloquence*の中で１８４もの詞姿を分別しているからである。

リチャード・レイノルド Richard Rainolde の『弁論・修辞学の基礎』*Foundacion of Rhetorike*(1593)はヘルモジネス Hermogenes とアフトニウス Aphthonius の弁論・修辞学の練習問題集 progymnasmata の英語版であるが、この冊子はチューダー初期の学校では大変もてはやされた。事実彼はアフォトニウスの扱った基礎的な型の１４の作文を取り上げレイノルド自身が付け加えた例題を用いて説明している。ただレイノルドが目指したアフォトニウスの原書に取って代わろうとした彼の野望は実現しなかった。というのも彼の冊子は初版だけで終わり、しかもこれもほとんど忘却に帰され、現在５部だけが散逸を免れているという有様であるからだ。

ちょうどこの頃、弁論・修辞学の研究史上の革命とも言える事柄がフランスのピター・レイマス Peter Ramus によって引き起こされる。中世以来の３学科（文法、修辞、論理）の旧態依然たる、漠然とした繰り返しの教授法に飽きたらずに、彼は論理学と弁論・修辞学を分割した。彼は＜発想・構想＞inventio(discovery)と＜配列＞dispositio(arrangement of matter)を論理学の領域に振り当て、弁論・修辞学には＜文体＞elocutio(style)と＜話し方＞pronuntiatio(delivery)だけを割り当てたのである。又レイマスは修辞学の５番目の役割、即ち＜記憶＞memoria(memorization of the speech)を無視した。＜文体＞の部分では専ら比喩論のような詞姿論に限定し、語源学やシンタックスの部分を文法の領域に託した。要するに彼の目指したのは知識の厳格な部門化とも言える作業である。彼が考えた理由は、諸学問に興る多くの誤謬と混乱は研究者がそれぞれの学問の固有の対象を間違っていることから起こるのである、と考えたからである。論理学と弁論・修辞学の教授は別々に行わなければならないが、実際の現場ではこの二つは結びついており、統合して役割を果たすと考えたのだ。カール・ウオレス Karl Wallace が指摘したごとく、レイマス流の二分法を推し進めるとその結果は＜発想＞、＜配列＞、それに＜判断＞の部分は専ら知性にゆだねられ、他方＜文体＞の受け持つ“装飾”の部分は想像力の分野にゆだねられるということになる。後ほどフランシス・ベーコン Francis Bacon がやることになる＜理性＞reason と＜想像力＞imagination の分割という、ややこしい仕事に突き当たるだろう。

レイマス自身は弁論・修辞学に関するテキストを発刊していないが、彼の哲学に基づくいくつかの弁論・修辞学の本を生むきっかけを与えたと言えるだろう。彼の最も熱心な弟子で且つ喧伝家はアウドマラス・タラエウス Audomarus Talaeus(Omer Talon)であった。彼はパリで１５４４年に *Institutiones Oratorae*(通称 *Rhetorica*)を出版するが、これはレイマスの論理学の本 *Dialecticae Libri Duo* と一対をなす事を目論んだものであった。１６世紀の後半と１７世紀の前半のイギリスの学校事情に関しての最も価値のある情報の一つである *Ludus literarius* 、通称 *The Grammar Schoole*(1612)で著者のジョン・ブリンズリー John Brinsley は、タラエウスの『修辞学』*Rhetorica* はイギリスの上質の学校で最も多く使われているテキストであったと述べている。その人気の最大の理由はこのテキストの持って

Akita University

いる簡潔性だとのことである。

ウイルバー・サムエル・ハウエルWilbur Samuel Howellは『１５００年から１７００年におけるイギリスの弁論・修辞学概観』*Logic and Rhetoric in England, 1500-1700* の中で、レイマスの大変革について広範に触れている。これによるとレイマスの弁論・修辞学を最初に同国人に紹介したのはガブリエル・ハーベーGabriel Harvey であったとのことである。彼ハーベーはこのときケンブリッジのクライスト学寮の弁論・修辞学の講師をしていた。ちょうどこの頃、つまり１５７４年の春頃、ローランド・マックレルメンRoland MacIlmaineがロンドンでレイマスの *Dialecticae Libri Duo* のラテン語版のテキストを発刊していた時期であった。これ以降タラエウスとレイマスが論理学と弁論・修辞学の範とされるようになったらしい。その例を挙げると：Dudley Fennerの *The Artes of Logike and Rhetorike*, 1584でありAbraham Fraunceの *The Lawiers Logike and The Arcadian Rhetorike* であり、これらは共に１５８８年に刊行されている。続くのが Charkes Butler の *Rameae Rhetoriacae Libri Duo*, 1597 と Thomas Farnaby の *Index Rhetoricus*, 1625, この冊子は１５版も数え１７６７年まで余命を保っていた。このような様々なテクストが出現し、一応の成功を収めたという事実は、ボールドイン教授の１６世紀の終わりからフランスのカルバン派の学校ではレイマスやタラエウスの学問傾向がドイツのルター派のメランヒトン Melanchthon とスツルムSturmを完全に凌駕していたという議論の論拠になっているのである。

１７世紀のイギリスの弁論・修辞学

１７世紀の間、イギリスの批評界がイタリア・ルネッサンスのおおらかな人文主義の理想からフランスのより合理的で、規則により厳格な態度にシストしていったことが見て取れる。ルネッサンスの批評家達は古典・古　代や中世並びの同時代の理論を折衷したものであった。つまりいかなる権威も又組織も究極のものとか、又包括的なものとして受け取られていなかった。１７世紀の後半のフランスの批評家達が規範となり、その規則がカノンとなり、イギリスの人たちの手本となったことは特筆に値するだろう。１７世紀のフランスの批評は大抵叙事詩と演劇を問題にした（これは概ねスカリジャーScaliger, カステルヴィトロCastelvetroやロボルテッロRobortelloのような１６世紀のイタリアの批評家が新アリストテレス主義を導入した結果なのだが）ために＜弁論・修辞学＞よりも＜詩学＞により注目が集まるようになったのだ。さらに＜詩学＞と＜弁論・修辞学＞の間の区別がだんだんぼやけたものになっていった。その結果これが１７世紀の弁論・修辞学のテキストだと指し示すことがしばしば困難になり、「これが弁論・修辞学の本だ」とか「これが詩学の本だ」と確信を持って言いにくくなったのだ。上の重点がシフトした結果は、１７世紀では以前の世紀においてよりだんだん弁論・修辞学のテキストが書かれなくなり、書かれた場合でもルネッサンス時代の弁論・修辞学のテキストが持っていた人気も、従って影響力も持てなくなったと言うべきだろう。

１７世紀の人たちは益々規則というのもに縛られると同時に、単純で実用に供する文体

Akita University

に興味を抱いた。自然科学に対する興味が芽生え一これはフランシス・ベーコン Francis Bacon が先鞭をつけるのであるが、その後は清教徒体制の反自然科学的な雰囲気が終焉を迎えた後は英国学士院 The Royal Society の会員達によって益々培われていったのだが一がいわゆる「科学的」文体の発展を助長するようになる。この傾向と相まって所謂「キケロ的文体」：キケロを祖と考えた装飾的な文体を模範と考えた修辞に凝った文体（Ciceronianism）に対する反動が起こるのである。モーリス・クロール Morris Croll やジョウージ・ウエリアムソン George Williamson 達はこの装飾に凝った文体とは対照をなす簡潔なセンテンス、複雑でない構文、簡潔で力強い言い回しや動きのあるリズムが特徴とされる所謂「セネカ的文体」Senecan style が作り上げられていく過程を綿密に研究している。この文体が弾みになって１８世紀の文章の一つの特徴をなす手軽で口語的な文体への道を開くのである。当然の帰結として比喩やその他の詞姿に凝らない所謂「簡素な文体」plain style が受け入れられるようになる。ただ英国学士院の提唱するにふさわし文体を模索しる過程で、ジョン・ドライデン John Dryden の登場によって説得力を持つ所謂「中間的文体」middle style が開発される。この文体の登場によって散文の文体が数学で使う記号のような極端に無駄を省いたが無味乾燥な文体が幅を効かす事態が避けられるようになったのだ。

１７世紀の弁論・修辞学を論じるにはまずフランシス・ベイコン(1561-1626)から始めるのが妥当だろう。彼は弁論・修辞学について組織的な本を書いているわけではないが、彼の書物の中には彼自身の作物や１７世紀に取ることになる修辞的な理論を明らかにする文言が散見される。彼の弁論・修辞学ついての理論を知る典拠は『学問のすすめ』*The Advancement of Learning* とこの本に増補しラテン語に訳した *De Augmentis Scientiarum* である。さらに補足的材料は『善と悪の色合い』*Colours of Good and Evil* と『新旧の格言』*Apophthegms, New and Old* にある。ベーコンの弁論・修辞学の理論を知る最も良い本はカール・R. ウオーレス Karl R. Wallace の『フランシス・ベーコンのコミュニケーションとレトリック』*Francis Bacon on Communication and Rhetoric* (University of North Carolina Press, 1943) である。論点は二つか三つに限定される。

「弁論・修辞学の義務と仕事は」とベーコンは『学問のすすめ』の中でいって、「理性 Reason を意志力 Will をよりよく働かすために想像力 Imagination に適用することである。」さらに後の作品の中でこれを敷衍して「弁論・修辞学は想像力に従属する、ちょうど論理学が理解力に従属しているように；レトリックの使命はもしそれを追及するなら、やる気を起こし意志力を刺激するためには、理性の命ずることを想像力に適応し、推称することにほかならない。」といっている。想像力と理性とをはっきりした区別された機能として見るとき、彼ベーコンはそれぞれの個々の機能と個々の領域について広範な議論をするための基礎・土台を置いたと言っていいかも知れない。そしてこうすことによってレイマス一派の論理学と弁論・修辞学の間の二分法を助長したのである。

想像力と理性を区別したものとしてとらえ、しかもそれにもかかわらず共に相補って働かなければならないという彼の見解は、ベーコンの文体についての諸考察の基礎をなしている。彼は想像力が理性に従属していると考えたので、彼は verb 対して res の優位性を提

Akita University

唱している。彼はルネッサンス時代の学校教育における弁論・修辞学を問題視している。特にキケロの影響を受けたものの、内容 matter よりも言語表現 words を重視している人たちだ。このような文体についての先入観の結果としてベーコンは次のようにいっている。

「人は事物よりは言葉を求め、つまり、語句の選択、文章の円滑なしかも清楚な構成や、小さな単位の節の甘美な抑揚、並びにその文の内容の重みよりは比喩的表現に代表される修辞的な詞姿をちりばめた変化を持たせた文章に魅了されるので、主題の価値や論理の展開の健全性、新たな発想の生命または判断の深さといったものにも注意を払わなければならない。」(『学問のすすめ』より)

彼は verba(言葉)より res (内容) を重視したとはいえ内容に見合う文体 (style) を全く無視したわけではなかった。彼が強調した三つの文体上の特徴は、1) 主題と文体がマッチすること、2) 簡潔な語彙を使うこと、3) つまり内容にふさわしいことを追求することcultivation of "agreeableness" であった。ベーコンが強調したのは文体と内容の緊密な関係のことで、これは当時のあらゆる文章に、ともすれば過剰に装飾を施す傾向にあった所謂キケロ風の弁論・修辞学者への抵抗の一表現であったわけだ。この文体観と密接に関わっているのがベーコンの「もし一人の人間が同じことを複数の人間に向かって話しかけるとき、それぞれの人間にふさわしい違った言葉使いをしなければならない」という、文体というのは聴衆にあわせなければならないというごく当たり前の助言だったのだ。

このベーコンの考え方に明らかに影響を受けたと思われる弁論・修辞学者の一人がカトリック系の法曹家のトーマス・ブラウント Thomas Blount(1618-79)であった。彼は１６５４年に『雄弁の学校』*Academie of Eloquence* という本を出版する。ホイエット・ハドソン Hoyt Hudson 教授の明らかにしたごとく、この２３２ページからなる本の最初の４８ページは、彼よりも先輩の法曹家のジョン・ホスキンズ John Hoskins の１７世紀の初頭に書かれた『演説と文体の指南』*Directions for Speech and Syle* からの無断の借用であった。ただこの本はホスキンズの名で世に出るのは１９３０年代になってからだった。それはともかく前者ブラントは例証を彼と同時代のフィリップ・シドニー卿 Sir Philip Sidney, ベン・ジョンソン Ben Jonson やエドモンド・スペンサーEdmund Spenser のような同時代の人の書き物から取った最初の人ではある。

ブラントにとって文体の四つの長所とは「簡潔性」、「明晰性」、「新鮮さ」life 、又は「機知」wit と [配慮] respect 又は [礼節] propriety であった。[簡潔性] に特に彼が第一にあげていることに注意することが肝要だ。(この部分は他の弁論・修辞学者が 'conciseness' と呼んでいるところだ) このような強調とブラントが [成句] sententia と他の修辞的技巧 figures を [簡潔な文体] curt style と関連づけていることは当時セネカ的修辞学の技法が台頭し始めている事情を明らかにしている。彼は明らかに commonplaces を扱った章で『雄弁とは我々一般人が流行らせようと目論んだものの上をゆく演説のことで、換言すれば手短に要領を得た文体と解釈し、我々の様々な想念をエッセンスに煮詰める、喩えて言えば

Akita University

様々な概念を一つの果球 cone の中に詰め、余分なものを削り落とすことだ』と言ったときは彼の念頭にあるのは、わさびのきいた文体のこと" pointed style" を指したものと解釈しても良い。ブランドは２５の詞姿を扱っているに過ぎないが（これの大部分はタラエス Talaeus が『修辞学』*Rhetorica* であつかったもの）他の３０ページは敷衍の方法につぎ込んでいる。

ブラントのテクストは文体 style に重きを置いているが、理性のしかりと歯止めをかけられた文体である。初版を出して３０年経過して５版が出る。１７世紀の弁論・修辞学の研究で輝かしい業績を現代の我々に残してくれたジョージ・ウエリアムソン George Williamson は *Sencecan Amble* という刺激的な本の中で「当時のこれ以外のいかなる弁論・修辞学の本もこのブラントの本ほど人口に膾炙したものはなかった」といっている。

当時の多くの修辞学の本は聖書を題材に用いていた。この中でも最もポピュラーなのがジョン・スミス John Smith による『ヴェールをはがれた弁論・修辞学の秘密』*The Mysteries of Rhetorique Unvailed*(1657) であった。彼は弁論・修辞学の詞姿を特に聖書を参照するという手法を取っている。しかもこの本は１７０９年までに９版を重ねている。清教徒の台頭と共に、この世紀では弁論・修辞学は教会での説教を行う人たちの道具に供されるようになっていった。ピューリタンの牧師でキングズ・ノートン校の校長でもあったトーマス・ホール Thomas Hall の *Centuria Sacra*(1654) というサブタイトル自体がこの共和体制期の時期に弁論・修辞学の用いられ方を露わにしている。

聖書をよりよく理解するため、又釈義するため約百近い決まりがある。これに加えて聖書に含んでいる最も素材になる修辞学上の詞姿 tropes and figures の概要や概説が加えられている。

オックスフォード大学のエクスター学寮の学寮長をし、引き続きオックスフォードの欽定講座担当教授になり、さらにロチェスターの主教も努めたジョン・プリドーJohn Prideaux は『聖なる雄弁又は聖書に書かれている修辞法』*Sacred Eloquence: or, The Art of Rhetoric as It is Laid Down in the Scriptures* と題する物々しい本を出しているが、彼らの名前は今は忘却の彼方にある。これらの御三方の中ではスミスの本が一時ちっよっと注意を引いたこともあったが、これらの聖書をネタにした弁論・修辞学の本は人気も影響力も微々たるものである。

トーマス・ホッブスの『ゴンデベルトへのダベナントの序説についての答辞』*Answer to Davemant's Preface to Gondibert* (1650) の中の一章、この部分は彼の言う「自然な文体」を扱った部分であるが、この後ドライデンがこの世紀の育ての親とも言われる平易で口語的な文体と修辞に対して適切なコメントを加えている。ホッブスによると＜自然で真摯な表現は二つのことに基づいているという、即ち「ものごとをよく熟知していること、そして多くを知っていること」であると。ホッブスはこの二つの側面についての心理的な諸効果を調べている。

「まず第一の兆候は“理解しやすさ”、“特性をはっきりさせること”、“表現の礼儀正

Akita University

しさ”であるがこれらの兆候はあらゆる種類の人間に受け入れやすい、それは無知を矯正するし、ある程度学問に通じた人の知識をとげとげしいものにしないのだ。後者の兆候はまず“表現に新鮮みを与え、精神を活性化する“、その理由は「新鮮さ」は他からの賞賛を勝ちうるし、賞賛は知的好奇心を引き起こす、これこそが知識を追い求めることの励みになるのだ」

次に＜多くを知ること＞の部分は＜発想･発見＞inventio の部分で扱われていて、この部分は話しの主題を見つけるというおなじみの弁論・修辞学の分野なのだ。しかしながら、この主題･事柄を発見･発想することは、結局事柄を敷衍するということに関心が増大すると＜文体＞style に影響を持ってくる。＜コピア＞copia の概念（豊かな物言いの意）は新規な表現とか、創意工夫という表現の多様性を生む結果となるのである。＜良く知ること＞はもともとは弁論・修辞学の問題にかかわるよりは論理学にかかわる問題である。しかしここでもまた知識・情報の質が、文体にある程度影響を持つとみなされてきた。ホッブス以前であれ以後であれ，沢山の修辞学者は一つのアイデアが‘明確に’把握されなければ‘明確に‘表現され得ない’と主張してきた。自然な文体である限り大げさな響きを持ち内容が空虚な語彙は避けるべきで、必要以上の語数で表現が全うされないような語句はこれまた避けるのが当然である。彼ホッブスが一貫して追い求めたのはそれまで流行であったけばけばしい文体の散文を追い払うことであったので，彼は弁論・修辞学の詩姿 figures and tropes に注意を向けなかったのは何も驚くにあたらない。要するに彼の感じでは言葉の綾などというものは幾分隠し味程度に使えば魅力を添えると言うことのようだ。

一見ホッブスは古典的な伝統を突き崩したように見えるけれど、彼は実際は古典に精通していたのだ。彼は何冊かの本をラテン語で書いているしツキジデス Thucydides やホメロスの作品をも翻訳しているし、アリストテレスの弁論・修辞学のなかなか役に立つダイジェスト版をも出版している。彼が奔放な空想力を制御しようとしたのには、所謂古典で言う中庸の美徳を発揮しようとしたのだろう。彼が合理的な美意識をもって新古典主義時代の“ほどほどの”散文の基礎を据えたことになる。これは実は１８世紀の弁論・修辞学と文芸批評を形作ることになる心理的な地ならしをなしたと言えるかもしれない。

もう一つの抑制した散文を生み出そうとすることに拍車をかけたのは王立科学学士院の存在だ。１６６４年の１２月のこと、この月は前出の王立科学学士院が創設されて２年後のことだが、学士院はその活動の一環として英語の改良のための委員会を設けた。この会のメンバーの中にはジョン･ドライデン、ジョン･エヴェリン John Evelyn, やトーマス･スプラット Thomas Sprat, そしてエドモンド・ウオーラーEdmund Waller がいた。彼らが望んだことは英語という言葉を洗練し、改良し、それらを定着させようとしたことであった。この計画は準備段階以上には進展しなかったが、この協会はこの時代の新古典主義時代の散文に幾分は影を落としている。ベーコンが奨励しようとした「科学的散文」の形成はこの協会の支持によるし、幾分方向付けも生まれた。先のトーマス･スプラットの『王立科学協会の歴史』の中の一部はこの改革のマニュフェストでもあったのだ。

「余りに饒舌に語ることは、諸芸術や専門の職業に対しては余りにも圧倒的なというか、

Akita University

過度の影響を与えるので」とスプラットは言って「全ての一般市民の関わる諸団体 civil societies から平穏と peace と良俗 good manners にとって百害あって一利無いものとして所謂雄弁 eloquence は追放すべきものである」と言っている。この病弊を治す唯一の処方箋は「文飾の持っている全ての敷衍癖や脱線癖や誇張癖を退けるべきである。ものごとを余分な言葉でなく、ほぼ同等の言葉数で言い表そうとするときは」と彼はつづけて、「エイブラハム・カウリーAbraham Cowley の伝記(1668)や彼の著作が最も理想に近い」と付け加えている。更にスプラットはカウリーは「今の時節のやり方に則って過不足が無いし、一般社会の会話体を使っていて、上流社会や宮廷の言葉遣い等を気取って用いていない」と持ち上げ、「良き文章という最も難しいこつをマスターしている」とまでいっている。又「この時勢に適した新しい美風 new comeliness をものしたにもかかわらず、時と場所に適した文体 decorum を見失っていない」とまで持ち上げている。

ただ残念なことにこれほど持ち上げられたカウリーは彼が目論んでいた『文体論』*Discourse Concerning Style* を書き上げる寿命に恵まれなかった。もう少し長生きしたら所謂この時代の趣向にあった所謂「簡素な文体」に関して多々論じたかも知れない。というのは彼自身ジョン・ドライデンが範とした見事な散文を書いた人ではあったからだ。この英文学史上では一応「形而上派の詩人」に分類されているカウリーは実は形而上学に疑問を持っていた。彼は学者は哲学を単なる言葉の遊びに帰してしまったという思いを持っていたし、彼の書いた詩文の中には所々に彼が目論んで果たせなかった文体論で展開したかも知れない言辞が見られるからである。

スプラットが提唱したような「簡潔な文体」plain style についての同様な意見が他の多くの人たちによっても表明されている。例えば *Ecclesiastes (1646)*, とか『哲学的言語の真の特質についての『試論』*An Essay Towards a Real Character and a Philosophical* e(1668) を書いた王立学士院の重鎮の一人であり、後でチェスターの主教になったジョン・ウルキンズ John Wilkins (1614-72) もその一人である。彼は前書で「文体は簡潔で自然でなければならない。ということは学者ぶった気取って固苦しいかったり、修辞学的装飾を排することである」" plain and natural , not being darkened with the affectation of Scholastical harshness, or Rhetorical flourishes" と主張している。 これは明らかにセネカの『書簡文集』の中の文体観の影響下にある言説で、ウルキンズは中庸の文体を推奨しているのである。彼はこうも付け加えている。「文体は空虚で不必要な同語反復を避けても十分に意味が通じなければならないし、内容に即したもので無ければならいので意味不鮮明であってはならないし、簡潔であっても空虚であったり、退屈至極で読むに耐えないものであってはならない」" Style should be full without empty and needless Tautologies and style shoud be so close, that they may not be obscure; and so plain, that they may not seem vain and tedious."

このウルキンズの言説は王立学士院が推奨する簡潔で実用に供した文体観の極端な例で、更にこうも言っている。「真に普遍的な文体は言葉では無く、それの表す事物であり想念である」" Real universal Character, that should not signify words, but things and notions"

Akita University

換言すれば、彼が言っているのは言葉は余分な連想を呼ばない数学の記号のようなものが理想だというのだ。しかしこと文学に関してはこのようなことはあり得ないことである。文学の言葉は豊かな連想力を喚起し、多義性なのが求められるからだ。

他の誰よりもまず現在の英語がこの方向を取ることを免れることが出来たのは恐らくドライデンの功績が預かって力があったのではなかろうか。つまりドライデンは数学的な無味乾燥な方向へ英語が傾くことに歯止めをかけたと言っていいかも知れない。それには彼の書いたものに散見される修辞学的なコメントとそれを実作で証明しているからだ。彼の文体についてのキーワードは＜適切性＞propriety である。彼が献言している＜適切性＞とは次の三つのことだ。即ち言葉の文体は１）場所柄、２）主題、３）話し手・聞き手にふさわしいことだと言うことだ。このドライデンの言う＜適切性＞と密接に関わりのあるのは当時の英語が外国語かぶれを犯しているとドライデンが戒めたことだろう。この点の彼の攻撃の的はベン・ジョンソン Ben Jonson であった。彼が言うには「ジョンソンは我々の言葉がロマンス語系の影響を受けることに手を貸し過ぎた」" he did a little too much to Romanize our tongue." とはっきり言っている。この点でドライデンが現代の英語の散文の父とたたえられるのは彼のこの彼の同時代の英語への働きかけであったと言っても過言ではなかろう。ドライデンが英語本来の語彙を使うことを推奨して、ラテン語的シンタックスよりは母国語のそれを使うことを薦めたことは英語をより洗練しようとした彼の目的の一部であったし、そうすることによって英語を今日の自然で簡素で且つのびのびしたものにしたのだ。そしてものを書くことの「精神の働き」spirits と「美点」beauties を彼が認識したことにおいて彼は１８世紀の弁論・修辞的批評にロンギノス風 Longinian の伝統（崇高な文体）が再び輝かしく再登場する道を開いたのだ。

厳格に言うと、ここ数ページにわたって考察してきた文書類は弁論・修辞学のテキスト類ではない。これらの文書はむしろ１８世紀において従来の弁論・修辞学の伝統が結局衰退の運命をたどることになることに作用した知的潮流とでも言うべきものを考察してきたことになる。彼らが文体ということにいささかこだわりすぎたということは当時のテキスト類がフランスのレイマスの影響 Ramistic program から逃れなかったことをものがたるだろう。つまり弁論・修辞学の領域が益々文体だけに限定されてきたことを指す。しかしこれらの文書・文献類が今日ごく普通に行われている肩苦しくない、自然体の口語的な散文体の土台作りを行ったと言える。今日薦められている散文の文体はあのルネッサンス時代の美辞麗句を連ねた散文体でもなく、１９世紀に一世を風靡したキケロ風の散文体でもなく雑誌「ニューヨーカー」や「レポーター」に見られる簡潔でエレガントな散文であり、ホワイト E.B.White, ジェームス・サーバーJames Thurber そしてジョージ・オーエル George Orwell のような作家に具現化されている。そしてこの種の書き物の淵源をたどるとドライデン、ジョン・バニアン John Bunyan やウエリアム・テンプル William Temple 等が活躍した王政復興期や、ダニエル・デフォーDaniel Defoe, スイフト Jonathan Swift, アジソン Joseph Addison が登場したアン王女時代にその萌芽が見られるのである。